

## 門外漢のコンサート鑑賞

松浦 俊博

三十年ほど前に、妻に誘われて新宿文化センターでの演奏会に行ったのが、東京アマデウス管弦楽団との最初の出会いだった。それは、妻や私の出身大学の同窓生が1973年に立ち上げたアマチュア楽団で、主に「ドイツもの」を演奏する。ヴィオラ奏者のSさんが、女子同窓会で妻と知り合い、チケットをくれたのがきっかけだ。

年に二回の演奏会に行くようになったが、ここ数年はコロナでお休み。十月にスカイツリーに近い「すみだトリフォニーホール」で再開したので行ってみた。コロナ対策で全席指定になり、第四列（最前列）の席であった。満席とは程遠かったので、拍手は強くしなればならず手が痛くなった。

曲目はシューマンとブラームスの交響曲で素晴らしい演奏に思えたが、的外れな素人感想を述べてもしょうがない。門外漢は内容以外にも興味がある。

演奏者は合計83人で、このうち賛助出演が三割弱の構成である。アマチュア楽団は演奏者を都合しあわなければ成り立たない。「魔笛」などの声楽つき楽曲を演奏する場合は、声楽はすべて賛助出演になる。

演奏者の服装はすべて黒服だが、女性の服装は種類が多く面白い。若くて自信のある人はノースリーブで腕を見せる。普通は袖付きの上着を羽織り、腕の部分がシースルーの場合もある。

姿勢は大事だ。椅子に浅く掛けて背筋を伸ばし、楽譜は顔の正面くらいの高さで遠く離すのが美しい。しかし演奏者たちは二十代から七十代までの年齢構成なので、年配者はどうしても背中が曲がってしまう。

楽譜はそれぞれの楽器により異なるので、ページをめくるタイミングが違っても面白い。以前は二人の演奏者で一つの楽譜を見ていたが、コロナのためか、一人で一つになった。指揮者の楽譜はすべての楽器が含まれるので分厚く、しょっちゅうページをめくっている。

指揮者はダンスするように全身を使って「次は君だ。流れるようにソフトに」などとはっきり指示する。まだ面白いことはいっぱいある。音楽がわからなくても演奏会は楽しめるものだ。